

# Coleridge と理性のサイエンス

笹川 浩

## はじめに

*Biographia Literaria* (以下 *BL* と略記) の中で Göttingen 大学での充実した学究生活の思い出を語る S. T. Coleridge は、真っ先に Johann Friedrich Blumenbach の名を挙げ、彼の指導を受け生理学や博物学の講義を受けたと述べている (*BL* 2: 207)。Blumenbach は物理的、化学的法則に還元できない生命原理を究明しようとし、「形成衝動」(*Bildungstrieb*) を生命の本質と措定した。そこで強調される動的で有機論的な生命観は、Coleridge に少なからず影響を与えたと考えられる。本発表では、そのような有機論的生命観を Coleridge がどのように発展させ、彼の生命観のみならず芸術観、世界観にも通底する普遍的理念に昇華させていったかを考察すると同時に、その有機的世界を捉えるために彼が必要だと考えたな理性のサイエンスがどのようなものかを、悟性のサイエンスと対比させつつ明らかにすることを試みた。

## 1. Blumenbach と「形成衝動」

Coleridge は *BL* で、Blumenbach の存在が当時の学術界でいかに大きかったかを述べているが、実際に 19 世紀前半のドイツの重要な生物学者のおよそ半数が彼の影響を受けたと考えられており (Watson 81)、Coleridge の賛辞は決して大げさなものではないことが分かる。18 世紀後半のヨーロッパでは、新たな植物や動物の品種の発見が相次ぎ、その一方で、動植物の内部構造を分析するのに役立つ化学や物理学も飛躍的に発展した結果、多くの解剖学者、生理学者、それに博物学者たちが競って生命を体系的、普遍的にとらえる原理を探求した (Lenoir 1)。Biology という語が生物一般を研究対象とした学問という意味で使用され始めた初出例として、*OED* は Thomas Beddoes の 1799 年の文章からの引用を挙げている。それ以前は、biology はむしろ今日の biography という意味で用いられていた。そのような知的風土の中で、Blumenbach も生命原理を探求し、その生命科学に関する基本的な考えを、1781 年に出版された著書 *Über Den Bildungstrieb und das Zeugungsgeschäfte* 『形成衝動及び生殖の営みについて』にまとめた。彼は、生命を機械論的には説明がつかない、つまり物理的、化学的法則には還元できない現象と見なす一方、物質とは全く独立して存在する力 *Lebenskraft* (生命力) が物質に影響を及ぼした現象であるとする生氣論 (vitalism) とも違う立場をとった。彼は、機械論的法則に還元できない生物固有の原理を認めつつも、あくまで生命を持つ有機体においては、物質と生命は不可分であると考えたのである。Lenoir は、Blumenbach のこのような二面的な考えを Vital Materialism と名付けた (Lenoir 9)。Blumenbach は、そのような有機体の存在と活動を可能にしているものとして、「形成衝動」というものを措定し、それを生命の本質と考えたのである (Blumenbach 12-13)。

彼が生命の本源的な原因と規定している形成衝動は、生物の個体化や成長あるいは再生という活動の因子になっているのだが、それは無目的に機械的に働くのではなく、生物体の全体と個の有機的な関係を維持しつつ、生命の営みを先導していくという意味で、目的論的生命観に基づいていると言える。この目的論的生命観は、Friedrich Schelling や Henrik Steffens のみならず、Coleridge にも影響を与えたと考えられる。尤も Schelling や Steffens が生命論を展開する基盤とする自然観は、あくまで自然の中だけで一貫しているのに対して、Coleridge の場合、自然を「神の存在と属性」を示すものとして位置付けている点で大きな違いがある (*Lay Sermons* 70)。

## 2. Coleridge の生命観—*Theory of Life* を中心に

James Gillman は王立外科医師会 (The Royal College of Surgeons) の懸賞論文に瘰癧論を提出することを考えていたが、その執筆を助けることになった Coleridge は、Gillman 宛の手紙で、論文の内容に関して、まず「生命」について書き始めるべきだと提案し、「生命」の定義として「個別性」(Individuality) を挙げ、その個別性は「普遍的生命」(universal Life) を前提として初めて可能になると主張する。さらにその個体の有機体としての成長や再生については、より普遍的な形態である磁気あるいは極性との類似性を示す必要があるとも述べている (*Collected Letters* 4: 690)。Coleridge がこのような主張を *Theory of Life* (1816) で展開した背景に、当時、スコットランドの外科医 John Hunter を記念した講演会で講演した John Abernethy と解剖学及び外科学の教授として着任した William Lawrence との間で繰り広げられた生命論争があった。Coleridge 自身は、Lawrence の機械論的な生命観に批判的だったが、Abernethy の生氣論的生命観にも共感できなかった。Coleridge は、生命や感情を物質から切り離して、それらを生物の「外側から」持ち込み、生物間の相違はす

べて組織の違いによるという Abernethy の主張に反対し、生命と物質は不可分であり、生命は「外側」からではなく「内側」から生じる力でなければならないと主張する (*Notebooks 4: #4518*)。この物質と生命の不可分性については、Coleridge は Blumenbach の考えを踏襲していると考えられる。Coleridge は *Theory of Life* の中で、生命の概念を表現する最も包括的な言い方として、「多の中の統一という原理として内部から現れる力」という表現を用いているが、そこで強調されていることは、生命は外から与えられる力ではなく、内的に発生している力であるということである (*Shorter Works 510*)。そして実際に目に見える形では、それを「個別化の原理」と規定している。つまり、生命体は、個々の要素がそれぞれその個を維持しつつ、他の要素とつながりを持ち、しかも常に全体との関係においてそれぞれの部分が存在する状態が、外からくわえられた力ではなく内的な力によって生まれている時、それを生命と考えるのである。そしてその生命の本質的原理が、外部に向かって現れる時、それは「個体化の原理」に基づいて現れるのだが、その個体化の原理は分離の原理と表裏一体になって、それが生命の活動に不可欠であると Coleridge は強調する。求心的な力が遠心的な力を前提にするように、また磁石において二つの極がそれぞれを構成すると同時に同じ一つの力の構成要素になるように、生命もまた、その活動の源泉に相反する力による極性があると考えるのである。

興味深いことは、Coleridge がこのような「多の中の統一」や「対立物の融和」という概念を、自然の生命、有機物の命を貫く原理としてだけでなく、自然界を超えて芸術の領域にまで敷衍していることである。彼の芸術論、例えば *The Principles of Genial Criticism* (1814) などでも、芸術美の原理として言及されている。この「多の中の統一」や「対立物の融和」という概念は、Coleridge にとって、全世界を支配する本質的原理でもあった。そしてその原理の正しさを裏付ける根拠の一つとして、Coleridge は生物界における有機体説を主張していたように思われる。OED が、organic という語を、生物に限定せずに、部分と全体の密接なつながりを表す広義の語として用いられた最初の用例として Coleridge の *BL* を引用していることを指摘しておく。

### 3. 理性のサイエンス

上述の通り、相反する力が協働することが生命の源泉であり、全世界を貫く原理であると Coleridge は考えているわけだが、相反する力が一つになることによって、それぞれが相殺しあって無にはならないのだろうか。Coleridge は対立物の融和に生命を読み取る力として「理性」の役割の重要性を指摘する。Coleridge は、「空想」にとっては対立する力の合一は無に等しくなるが、「理性」は、そこに積極的な生産性、つまり生命を認めることができると考える (*Shorter Works 521*)。というのも、理性の働きは、「一なるものとしての全体」の法則を認識することであり、つまり事物を有機的に捉える力なのである。それに対して「悟性」は、専ら「時間と空間の中にある個別的なものを量、質、関係において知る」ことしかできないのである。だからこそ Coleridge は「悟性」を「現象の科学」と称し、「理性」を「普遍的なものの科学」と称したのである (*Lay Sermons 59-60*)。そして Coleridge は、生命の本質を認識するには、個々の自然の事物を自然全体との関係のうちに捉え、さらに神という普遍の中にそれらを捉える理性が、即ち事物を有機的に捉える理性による「普遍的なものの科学」が、不可欠であると考えるのである。

### 引用文献

- Blumenbach, Johann Friedrich. *Über den Bildungstrieb und das Zeugungsgeschäfte* (Dietrich: Göttingen, 1781, reprinted in 1971 by Gustav Fischer Verlag, Stuttgart)
- Coleridge, Samuel. *Biographia Literaria, or Biographical Sketches of My Literary Life and Opinions*. Ed. James Engel & W. Jackson Bate. 2 vols. Princeton: Princeton University Press, 1983.
- • • *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*. Ed. Earl Leslie Griggs. Vol.4. Oxford: OUP, 1959.
  - • • *Shorter Works and Fragments*. Ed. H. J. Jackson and J. R. de J. Jackson. Vol.1. Princeton: Princeton University Press, 1983.
  - • • *The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge*. Ed. Kathleen Coburn and Merton Christensen. Vol.4. Princeton: Princeton University Press, 1990.
  - • • *Lay Sermons*. Ed. R. J. White. Princeton: Princeton University Press, 1972.
- Lenoir, Timothy. *The Strategy of Life: Teleology and Mechanism in Nineteenth-Century German Biology*. Chicago: The University of Chicago Press, 1982.
- Watson, Peter. *The German Genius: Europe's Third Renaissance, the Second Scientific Revolution, and the Twentieth Century*. London: Simon & Schuster, 2010.